

学位被授与者氏名	相良 信樹 (さがら としき)
論文題目	The Dark Knight と A Clockwork Orange における悪の考察 —悪の背後にある真実を求めて—
論文審査結果の要旨	<p>この世の中に悪が存在するのは何故なのかという疑問から始まった本研究であるが、好奇心旺盛で研究熱心な論者は、多くの批評書や研究書、関連の研究分野の資料を読み込み、紆余曲折を繰り返す中で、この世の中からどうやらなくなりそうにない悪とどう向き合うのかという問いを投げかけ続ける中で、最終的にその存在意義に目を向けることとなった。対象作品に関する先行研究についても丹念にあたり、手堅い論証を心がけている。同時に、哲学や心理学といった関連分野にも関心を向け、様々な分野の知識を身に付け、それらを適宜、論の中に盛り込むことで、多様性に富み信憑性が高く、興味深い論を組み立てることに成功している。</p> <p>また、本稿の中で圧巻なのは、Burgess の <i>A Clockwork Orange</i> の結末解釈である。多くの批評家が Alex の凄惨な暴力行為は「若気の至り」であり、彼は結末で大人へと成長し幸せな結婚生活を営むだろうと彼の明るい未来予想図を読み取る中で、論者は従来 of 批評家たちが深くこだわることのなかった結末部分の細部に目を向け、表現の微妙なニュアンスにこだわることで、Alex の自殺のほのめかしを読み取る。この新説は実に興味深く、意義深いものであり、そうすることで、利己的な人間たちと信頼関係を築くこともできず絶望し、利己的な管理社会に批判の目を向ける彼の苦悩や苛立ち、そして寂しさをより浮き上がらせることになる。更には、そこに我々は彼からの重要な SOS 信号ともいえるべき重要なメッセージをより強烈に意識することができるのである。</p> <p>また、二分法的思考に偏りがちな現代社会に警鐘を鳴らし、Batman (蝙蝠) の名前と存在様式を結び付け、その両義性にこそ意義を見出し、そこに希望を見出している点も高く評価できるだろう。</p> <p>今回の論文作成の段階においては時間の都合上、映画や小説といった文化の中に描かれる悪の問題に終始したが、教育者を目指す論者は、教育現場におけるいじめや体罰といった、いわゆる「悪」というものにも関心があり、今後、今回の研究内容や審査員からの助言は、教育現場においても様々な折に活かされることと期待できる。</p> <p>2020年2月19日に、北九州市立大学北方キャンパス本館 E-313 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士論文(英米言語文化)として十分な内容であると判定した。</p>